思考を繰り返しながら課題解決力を高める
中学校社会科指導の工夫

――　パフォーマンス課題を取り入れた単元構想と学びナビの活用を通して　――

長期研修員　　五十嵐　千晴

《研究の概要》

本研究は、中学校社会科の学習において生徒が思考を繰り返しながら課題解決力を高めることを目指し、以下の手立ての有効性について実践を通して明らかにしたものである。

１　「つかむ」過程で現実感のあるパフォーマンス課題のシナリオと生徒の課題把握の場面をリンクさせ、これを単元を貫くパフォーマンス課題として設定し、解決に向けて追究の視点となる問いを見いだす。その上でこれらの問いを基に思考を繰り返しながら自分の考えを形成、再構築していけるような単元構想とする。

２　「学びナビ」というシートを活用し、自分の思考の過程を可視化することで、自己の考えを形成したり、再構築したりする際の手掛かりとする。

キーワード　【社会－中　課題解決力　単元を貫くパフォーマンス課題　学びナビ】

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｇ０２－０３　令和３年度　２７６集

Ⅰ　主題設定の理由

現代社会は急速な変化を遂げており、将来予測が困難な時代になると言われている。このような社会の変化に対応するためには、物事を様々な視点から捉えたり、自分の考えをまとめて表現したり、他者と関わり合う力が必要になると考える。

しかし、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編の改訂の趣旨及び要点において、これまでの成果と課題の中で「主体的に社会の形成に参画しようとする態度や，資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分であること」が指摘されている。本県でも、第３期群馬県教育振興基本計画の基本施策２において「確かな学力の育成」が掲げられており、施策の柱４に示された現状と課題では、「必要な情報を取り出して自分の考えを述べたり、考えた方法や理由を説明したりすることには、課題が見られます」とある。また、取組の方向には「生徒の思考力、判断力、表現力や読解力、物事を多面的に捉える力、学習を日常生活と結び付ける力などを育成する」と示されている。国や県の課題となっているこれらの力を育成していくためには、課題を追究したり、解決したりする際に生徒が常に思考を働かせて課題解決に向かう授業を今まで以上に実践していくことが必要であると考えパフォーマンス課題に着目した。

パフォーマンス課題は、よりリアルな文脈の中で生徒が様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求める課題である。また、これを授業の中に導入することでその解決の過程を通して、習得した知識と技能を生かして思考力・判断力・表現力を育成することにもつながると言われているものである。

そこで、はばたく群馬の指導プランⅡに示されている単元構想の導入部分のように「なぜ」「どのように」などの課題意識を高められるような資料を提示し、併せて、自分たちで課題解決するという場面を取り入れた現実感をもったパフォーマンス課題を単元を貫く課題として生徒と共に設定する。そうすることで、生徒は具体的な状況を捉えることができるため、思考を働かせやすくなり、学ぶ意欲を高めることができると考えた。また、このようにして学習意欲を高めた上で、課題解決に向けて見通しをもたせ、生徒が見いだした課題や、それを追究するための視点となる問いを意識し、それらを基に、常に思考を繰り返しながら課題解決に向かう単元構想にすることで、生徒の課題解決力の向上につなげていきたいと考えた。

さらに、一枚のシート上で、自分の思考の過程を可視化する「学びナビ」というシートを使い、生徒が思考を繰り返しながら得た知識や、事象を関連付けて思考・判断したことを１単位時間の学習ごとに記述していくことで、自分の考えを形成し再構築する際の手掛かりにすることができるため、思考をつなぐことに加え、深めていくことにもつながると考えた。

このように、単元構想を工夫することや思考の過程を可視化する「学びナビ」を活用することで、生徒が思考を繰り返しながら課題解決力を高めることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

中学校社会科において、「つかむ」過程で単元を貫くパフォーマンス課題を生徒と共に設定し、生徒の思考が課題解決に向けて繰り返し働くように単元構想を工夫することや、単元を通して、毎時間得た知識や思考・判断したことを記述し、自分の思考の過程を可視化する「学びナビ」を活用することが、思考を繰り返しながら課題解決力を高めるための手立てとして有効であったか、実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の仮説

１　現実感のあるパフォーマンス課題を「単元を貫く課題」として、「つかむ」過程で生徒と共に設定することで、生徒はリアルな文脈から状況を具体的に捉えることができるため、自ら課題解決の

見通しをもち、追究の視点となる問いを見いだすことができるであろう。その結果、単元を通してそれらの問いが意識的に働き、生徒はそれを基にして、思考を繰り返しながら自己の考えを形成したり、再構築したりすることができるようになり、課題解決力を高めることができるであろう。

2　学びナビを単元を通して活用し、１単位時間ごとに生徒が思考を繰り返しながら得た知識や、社会的事象を関連付けて思考・判断したことを記述し、思考の過程を可視化すれば、自己の考えを形成したり再構築したりする際の手掛かりとなるため、課題解決力を高めることができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　文言の定義

①　「課題解決力」とは

本研究では、資料を基に課題を見いだす力、見いだした課題に対して、資料を基に事実を捉えることができる力、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察することができる力、根拠をもって自分の考えを提案したり、他者の意見から自身の考えを再構築したり、判断したりすることができる力の総称とする。

②　「思考を繰り返しながら課題解決力を高める」とは

生徒が単元を通して、また１単位時間の中でも課題の解決に向けて、（1）の①で示した力に関連する問いによって、思考を繰り返しながら課題解決力を高めていくことである。具体的には、生徒が見いだした学習課題に対して、「どこで」「どのような」などの問いから具体的知識を獲得し、「なぜ」「どうして」という問いから個々の事象を関連付けて、因果関係や特色、意味について考察する。さらに、「どうするべきか」「なぜそう言えるのか」という問いから、自己の考えを形成したり、他者の意見などを基にして再構築したりすることができる力を身に付けていくことである。

③　「パフォーマンス課題を取り入れた単元構想」とは

はばたく群馬の指導プランⅡに示されている単元構想の「つかむ」過程において、生徒の課題把握の場面と、「自分たちで解決する」という現実感のあるパフォーマンス課題のシナリオをリンクさせ、これを単元を貫くパフォーマンス課題として位置付ける。「追究する」「まとめる」過程では、その課題の解決に向けて追究し、自己の考えを形成、再構築していく単元構想である。現実感のある課題を「つかむ」過程で設定することによって、学習対象となる事象が生徒にとってより近い存在となり、今まで以上に当事者意識が働くと考えられる。そのため、生徒はより具体的な状況で思考を繰り返しながら課題解決に向かうことができると考える。

④　学びナビとは

単元を通して生徒の１単位時間ごとの思考の過程を可視化し、課題解決に向けて自己の考えを形成、再構築していくための手掛かりとなるシートである。自分の思考の根拠となる追究の視点に関わる問いや、使用した資料をシートの左の欄に記述し、それを基にして追究し、思考・判断した内容を右の欄に記述する形式である。単元における思考の過程を一枚のシートで可視化できるため、生徒は自分の思考のつながりや深まりを確認しながら学習を進めることができると考える。

(2)　手立ての説明

①　パフォーマンス課題を取り入れた単元構想

はばたく群馬の指導プランⅡの単元構想を基にして、これにパフォーマンス課題を取り入れる。「つかむ」過程では生徒と共に単元を貫く課題としてパフォーマンス課題を設定する。ここで扱うパフォーマンス課題のシナリオは、教師が構想したものを活用するが、生徒の課題追究への意欲をより高めたり、主体性を発揮させたりするための手立ても必要である。次ページ図１は、単元を貫くパフォーマンス課題を設定するまでの流れを示したものである。図１の①で示した課題把握の場面では、生徒のもっている既存の知識を活用したり、教師が意図的に準備した資料を読み取らせた

りすることで、対話を通して「なぜ○○なのか」「どのような○○なのか」といった問いを見いだしていく。その後、①の活動とリンクさせたパフォーマンス課題のシナリオを②で示す。このシナリオには、最後に、自分の考えを提案したり、発表したりするという内容が含まれている。そのため、生徒は課題解決に向けて、更に追究の視点が必要となることに気づき、③のようにその視点の検討に入り、それに関わる問いを見いだすこととなる。最後に検討した追究の視点に関わる問いを共有し、④で単元を貫くパフォーマンス課題として確認する。このように、パフォーマンス課題のシナリオと生徒の学習活動をリンクさせることで、生徒はより具体的な状況を捉えることができるため、課題解決に向けて学ぶ意欲が促されるだけでなく、課題解決に向けての見通しを立てやすくなったり、追究の視点に関わる問いも、検討しやすくなったりすると考えられる。また、その後の「追究する」過程においても、自ら見いだした追究の視点に関わる問いが意識的に働き、生徒はそれを基にして思考・判断を繰り返していく状態となり、課題解決に向けて、自分の考えを形成したり、再構築したりすることができようになると考える。最後の「まとめる」過程では、生徒自身が学んだことを活用して選択・判断させる場を設定したり、選択・判断したことを表現させたりする場の工夫が大切である。この点においても、パフォーマンス課題は、生徒が様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求める課題であるため、有効であると考える。

このように、本研究の単元構想は、パフォーマンス課題を取り入れることによって、生徒の思考が繰り返される状態とし、課題解決力の向上を図っていくものとなる。具体的な単元計画については、Ｖの４の項目で示す。

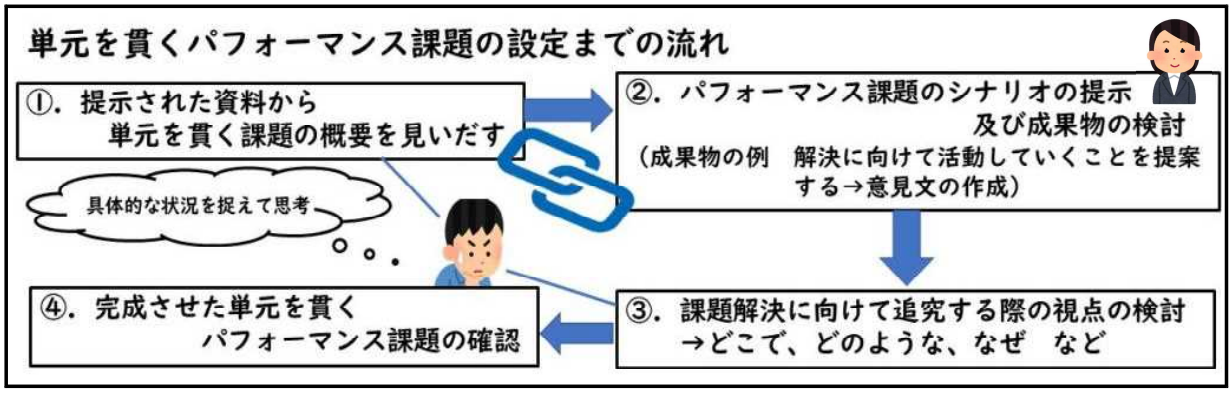


図１　単元を貫くパフォーマンス課題の設定までの流れ

② パフォーマンス課題の作成

パフォーマンス課題のシナリオには、GRASPSと略記される六つの要素（西岡加名恵氏によって日本語に翻案）を盛り込むことが推奨されている。本研究のパフォーマンス課題のシナリオにもその要素（表１）を参考にして取り入れ、生徒が場面を具体的にイメージし、状況をつかんだ上で、課題解決に結び付く追究の視点に関わる問いを見いだすことができるようにパフォーマンス課題のシナリオを作成した。

表１　パフォーマンス課題に盛り込む六つの要素（：具体例）

な　ー何がパフォーマンスの目的（Goal）か？	：活動に協力してもらえるように提案する
やンー（学習者が担う、またはシミュレーションする）役割(Role)は何か？	：○○中学の生徒
だナー誰が相手(Audience)か？	：多くの人たち
アア	
そ　ー想定されている状況(Situation)は？	：課題の解決につながる支援策などの提案
う　ー生み出すべき作品(完成作品・実演：Product、Performance)は何か？	：意見文
か　ー(評価の)観点(成功のスタンダードや規準：Standards and criteria for success)	

注：西岡加名恵・石井英真編著　『Ｑ＆Ａでよくわかる！見方・考え方を育てるパフォーマンス評価』　明治図書（2018年）の38ページを基に作成

③ 学びナビ（次ページ図２）の活用

生徒は、「つかむ」過程で見いだした１単位時間における追究の視点及びそれに関わる問いや、

使用した資料を学びナビの左の欄に記入する。追究によって得た知識や、それを基にして思考・判断した内容については、右の欄に記入する。１単位時間の学びを左右の欄で関連付けることによって、どのような視点で、どのように考えたのかという自分の思考の過程が可視化される。さらに、単元を貫くパフォーマンス課題を学びナビに掲載することで、常にパフォーマンス課題のシナリオを確認することができるだけでなく、各単位時間における自分の思考が、課題解決に向けてどのようにつながっているのかという思考も働かせることができる。このように、この学びナビを基に、思考を繰り返しながら自己の考えを形成したり、再構築したりする過程を可視化し、明確にすることで、課題解決力を高めていくことにつながると考えられる。また授業者は、この学びナビから、生徒がどのように思考を働かせて、学習に向かっているかを読み取り、支援をすることができるため、この点においても生徒の課題解決力を高めることができると考える。

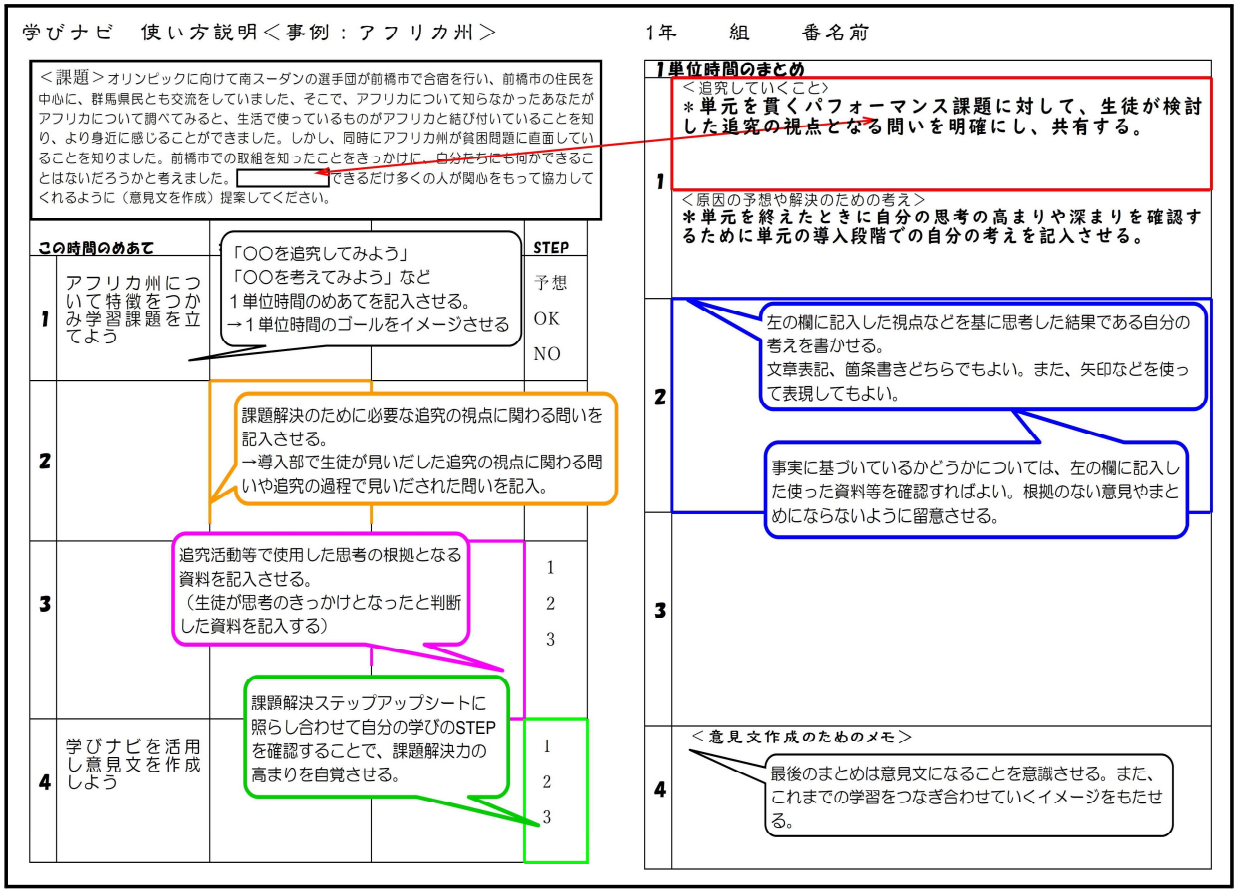


図２　学びナビ（アフリカ州における事例）

④　課題解決ステップアップシート（図３）の活用

生徒が学びナビに記述した内容とこのシートを照らし合わせて、自分の課題解決力について確認するためのものであり、学びナビでの思考の過程の可視化を補助するためのシートである。単元を貫くパフォーマンス課題のシナリオにも各ＳＴＥＰで表されている問いを反映させ、生徒が追究活動を進める際に働く思考と関連するものとなっている。

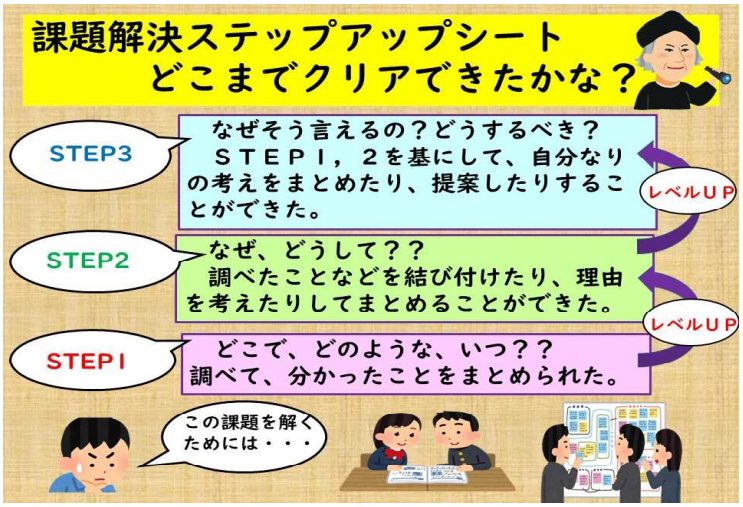
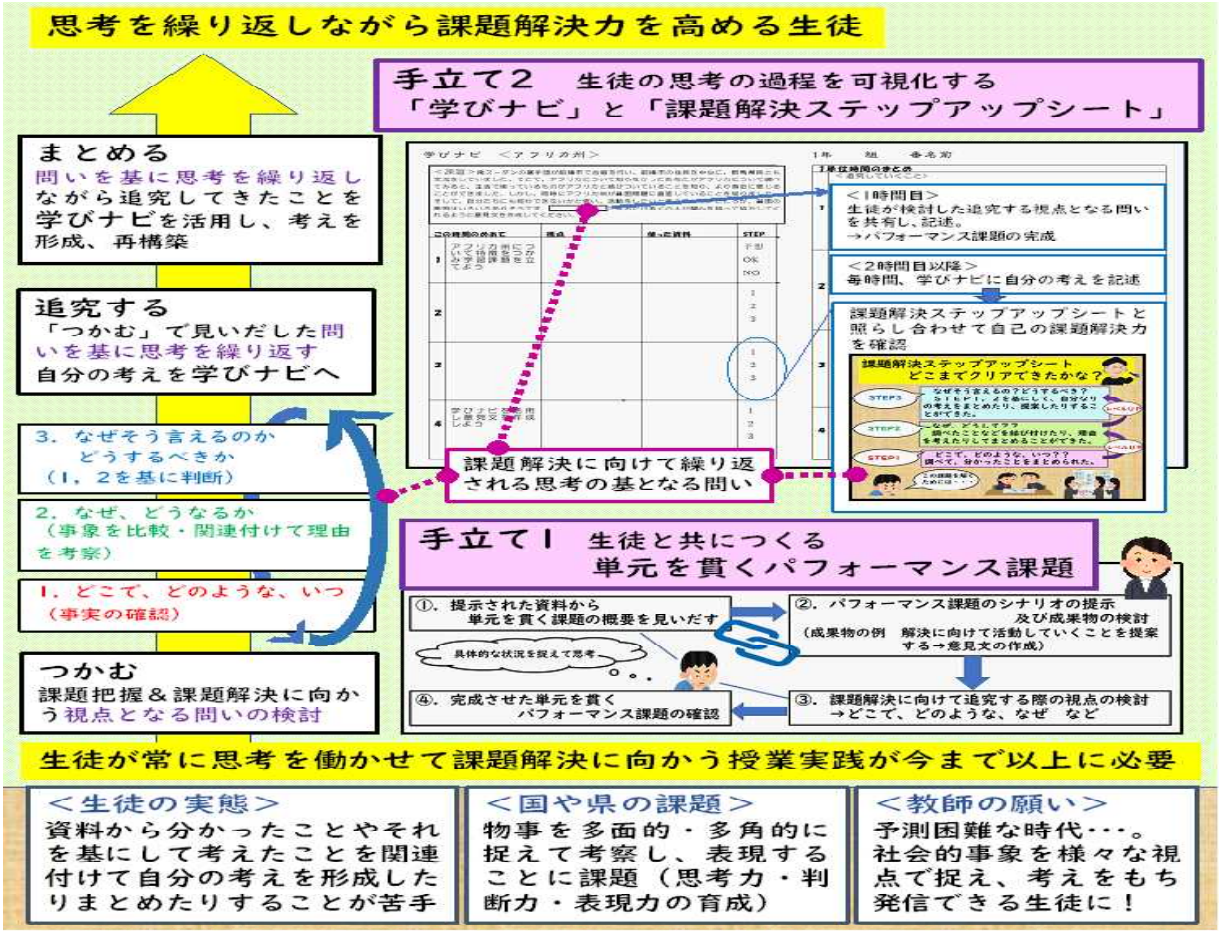


図３　課題解決ステップアップシート

2　研究構想図



Ⅴ　実践の計画と方法

1　授業実践の概要

(1)　授業実践Ⅰ	
対　　象	研究協力校　中学校第１学年　94名
実 践 期 間	令和３年　７月１日～７月19日　８時間
単　元　名	世界の人々の生活と環境
単元の目標	世界各地の人々の生活について、自然及び社会的条件などに着目して、その地域の特色を追究する活動を通して、特色や多様性など理解したことや、変容について考察したことを説明することができる。
(2)　授業実践Ⅱ	
対　　象	研究協力校　中学校第１学年　94名
実 践 期 間	令和３年　10月20日～11月５日　４時間
単　元　名	世界の諸地域　アフリカ州
単元の目標	アフリカ州について、地域的特色を理解するとともに、貧困問題などの地球的課題の要因や影響を課題として捉え、背景や要因を追究する活動を通して現状を理解し、課題解決に向けて考察したことを提案することができる。
(3)　授業実践Ⅲ（指導案提供）	
対　　象	研究協力校　中学校第２学年　80名
実 践 期 間	令和３年　11月２日～11月19日　５時間
単　元　名	日本の諸地域　近畿地方
単元の目標	近畿地方において、地域的特色を理解するとともに、人口の増加や産業の発展

	に伴って生じた課題の背景と理由を追究する活動を通して、環境保全に向けた取組について考察し、その在り方について提案することができる。

2　検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し１	現実感のあるパフォーマンス課題を単元を貫く課題として生徒と共に設定し、課題解決に向けて単元構想を工夫することは、生徒が見通しをもって学習に取り組み、思考を繰り返しながら課題解決力を高めるために有効であったか。	・アンケート ・学習活動の観察 ・授業ビデオの分析 ・学びナビへの記述 ・パフォーマンス課題の成果物
見通し２	学びナビを活用し、追究の視点に関わる問いや使用した資料及び生徒が１単位時間で得た知識や、思考・判断した内容などを記して、思考の過程を可視化することは、生徒が自己の考えを形成したり、再構築したりする際の手掛かりとなり課題解決力を高めるために有効であったか。	・アンケート ・学習活動の観察 ・学びナビやワークシートへの記述 ・パフォーマンス課題の成果物

3　評価規準

(1)　授業実践Ⅰ		
評価規準	知識・技能	①人々の生活は、その生活が営まれる場所の自然及び社会的条件から影響を受けたり、その場所の自然及び社会的条件に影響を与えたりすることを理解している。 ②世界各地における人々の生活やその変容を基に、世界の人々の生活や環境の多様性を理解している。その際、世界の主な宗教分布についても理解している。
	思考･判断･表現	世界各地における人々の生活の特色やその変容の理由を、その生活が営まれる場所の自然及び社会的条件などに着目して、多面的・多角的に考察し、表現している。
	主体的に学習に取り組む態度	世界各地の様々な自然及び社会的条件に関心をもち、世界各地の人々の生活の特色やその変容について主体的に追究しようとしている。
(2)　授業実践Ⅱ		
評価規準	知識・技能	アフリカ州の地域的特色に関する資料を収集して有用な情報を選択し、その特色や地域の課題を読み取り、理解している。
	思考･判断･表現	アフリカ州に見られる地球的課題（貧困問題）の要因について地域の広がりや結び付きなどに着目してそれらの地域的な特色と関連付けて、多面的・多角的に考察し、表現している。
	主体的に学習に取り組む態度	アフリカ州についてよりよい社会の実現を視野に、そこで見られる貧困問題に関する課題を主体的に追究し、解決しようとしている。
(3)　授業実践Ⅲ（指導案提供）		
評価規準	知識・技能	近畿地方について、その地域的特色や地域の課題を理解するとともに、環境保全の在り方をめぐる問題について、必要となる情報を収集し、その特色を資料から読み取り、理解している。
	思考･判断･表現	近畿地方における環境保全に向けた取組の在り方を、産業の発展と環境対策、観光と歴史的景観の保全の関係に着目し、自然、産業、歴史的背景などの特色と関連付けながら多面的・多角的に考察し、表現している。
	主体的に学習に	近畿地方を基にして、よりよい社会の実現を視野に、環境問題や保全に

	取り組む態度	関する課題に対して主体的に追究し、解決しようとしている。

4　指導計画（授業実践Ⅱを記載。各単位時間における詳細については別添資料参照）

時程（次）	過程	学習活動	評価規準、評価方法等 「○」は評定に用いる評価、「●」は指導に生かす評価
第１時	つかむ	**［本時の学習課題］**アフリカ州について特徴をつかみ学習課題を立てよう ・日本とアフリカ州の交流や、生活の中で使われているものがアフリカ州で産出されている資源や材料を使っているものを示す資料を提示し、アフリカ州を身近に感じる。 ・アフリカ州の鉱山資源の分布や輸出品を示す資料と、栄養度や平均寿命などを示す資料からアフリカ州はどのような地域か考察する。 ・この二つの活動を基に単元を貫くパフォーマンス課題を設定する。	
［単元を貫くパフォーマンス課題］オリンピックに向けて南スーダンの選手団が前橋市で合宿を行い、前橋市の住民を中心に、群馬県民とも交流をしていました。そこで、アフリカについて知らなかったあなたがアフリカについて調べてみると、生活で使っているものがアフリカと結び付いていることを知り、より身近に感じることができました。しかし、同時にアフリカ州が貧困問題に直面していることを知りました。前橋市での取組を知ったことをきっかけに自分たちにも何かできることはないだろうかと考えました。**（貧困によってどのような問題が起きているのか、何が原因となっているのか、それを解決するためには、どのようなことを行っていけばよいのかをまとめ）**できるだけ多くの人が関心をもって協力してくれるように**【意見文を作成】**提案してください。			
		・課題を解くために（　　）に当てはまる必要な情報は何かを検討し、追究の視点となる問いや見通しを共有し、単元を貫くパフォーマンス課題を完成させる。 ・どのようなことをしたらよいのか、解決策を検討する。	●〔主体的に学習に取り組む態度〕 アフリカ州の地域的特色に関する資料から疑問をもち、単元を貫くパフォーマンス課題を設定し、学習課題を解決する見通しをもっている。（観察・ワークシート・学びナビ）
第２時 ～ 第３時	追究する	**［本時の学習課題］** なぜアフリカ州が貧困の問題を抱えているのか、自然環境や歴史から迫ってみよう ・アフリカ州の自然環境の特色やヨーロッパ州とのつながりを資料から読み取る。 ・アフリカ州の中でも特にどのような地域で貧困の問題が表れているのか自然環境と関連付けて考察する。 ・ヨーロッパ州とのつながりを植民地支配の歴史と関連付けて考察する。 ・考察したことをキーワードを使って整理し、学びナビにまとめる。	○〔知・技〕 自然環境やヨーロッパ州とのつながりを資料から読み取り、地域的特色や課題を理解している。（ワークシート） ●〔思・判・表〕 自然環境の特色や、歴史的背景から貧困の要因を、多面的・多角的に考察している。（ワークシート・学びナビ）
		［本時の学習課題］ なぜアフリカ州が貧困の問題を抱えているのか、産業の特色から迫ってみよう	

		・プランテーション農業や、モノカルチャー経済など産業の特色を資料から読み取る。 ・モノカルチャー経済における課題について考察し、キーワードを使って整理し学びナビにまとめる。	○〔知・技〕 モノカルチャー経済などの産業の特色や課題を、資料から読み取り、理解している。（ワークシート） ●〔思・判・表〕 産業の特色と貧困の要因を結び付けて考察している。（ワークシート・学びナビ）
第４時	まとめる	**［本時の学習課題］**学びナビを活用して、意見文を完成させよう ・アフリカ州が抱える貧困の問題や解決に向けての取組について、学びナビを基にして、振り返りながら意見文を作成する。	○〔思・判・表〕 アフリカ州に見られる地球的課題（貧困問題）の要因について地域の広がりや結び付きなどに着目して、それらの地域的な特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現している。（学びナビ･意見文） ○〔主体的に学習に取り組む態度〕 アフリカ州について、よりよい社会の実現を視野に、そこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。（観察･学びナビ）

Ⅵ　研究の結果と考察

第１学年で実践を行った授業実践Ⅱを中心に研究の結果と考察を述べていく。

１　検証の視点１

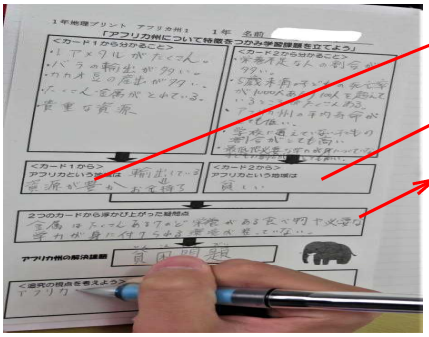
現実感のあるパフォーマンス課題を単元を貫く課題として生徒と共に設定し、課題解決に向けて単元構想を工夫することは、生徒が見通しをもって学習に取り組み、思考を繰り返しながら課題解決力を高めるために有効であったか。

(1)　結果

まず、単元を貫くパフォーマンス課題の設定の場面から述べていく。生徒にとってアフリカ州を身近に感じられる機会が少ないため、前橋市における南スーダンの選手団との交流の様子やアフリカ州と関わりのある商品を紹介した。次に示すのは、生徒の反応の一部である。

生徒１：日常生活で使っているものでアフリカと関係しそうなもの？あまりないのでは？
生徒２：チョコはアフリカと関係のあるものだろう。
生徒３：コーヒーは？
生徒４：なんとか山・・・。あ、キリマンジャロ。と、いうことは、関係があるのでは？
生徒５：ゲーム機や、スマホは関係ないのでは？
生徒６：意外と関連しているものがあるのだな。

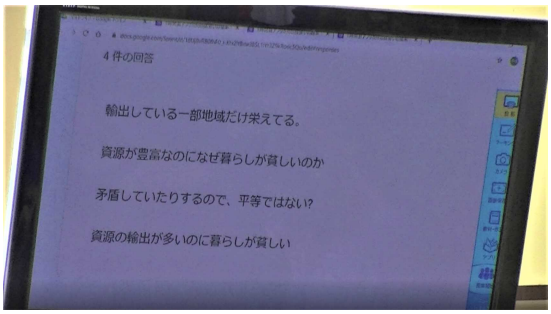
この活動により、アフリカ州を身近に感じたところで、本単元の課題に迫る二枚のカード資料を提示した。カード１にはアフリカ州で採れる鉱産資源の分布図やレアメタルの産出量、カカオの産出量を掲載し、読み取ったことを基にして、アフリカ州とはどのような地域なのかを検討させた。その後、アフリカ州の就学率、世界の乳児死亡率や総人口に占める栄養不足の人口の割合を示した主題図を掲載したカード２を示し、同様に資料を読み取ったことを基にしてアフリカ州とはどのような地域なのかを検討させた。次ページ図４は、生徒がアフリカ州とはどのような地域なのかを検討し、二つのカードから考えた疑問点についてまとめたものである。



＜カード１より＞
資源が豊か、輸出しているからお金持ち？
＜カード２より＞
貧しい
＜疑問点＞
金属はたくさん採れるけれど、栄養がたくさん摂れる食べ物や、必要な学力が身に付けられる環境が整っていないのはなぜだろう。

図４　生徒のワークシート

それぞれが読み取ったことを基にして、意見交換を行い、各班で疑問点について検討した。その後、クラス全体で共有し、「なぜアフリカ州は貧困の問題を抱えているのか」という課題を作成した（図５）。さらに、冒頭で紹介した南スーダンの現状や南スーダン選手団に対する前橋市の取組を紹介し、交流だけではなく支援事業が行われていることに気付かせた後、生徒のこれまでの学習活動とパフォーマンス課題のシナリオをリンクさせて確認した（図６）。



・輸出している一部の地域だけ栄えている
（全ての場所が貧しいのか？）
・資源が豊富なのになぜ暮らしが貧しいのか
・矛盾したりしているので平等ではない
（輸出ができているのでお金は入ってくるのに、貧しいのは、場所によって違いがあるのでは？）
・資源の輸出が多いのに暮らしが貧しい

図５　各班の意見を大型画面に映し、共有

オリンピックに向けて南スーダンの選手団が前橋市で合宿を行い、前橋市の住民を中心に群馬県民とも交流をしていました。

そこで、アフリカについて知らなかったあなたは、アフリカについて調べてみると生活で使っているものがアフリカと結び付いていることを知り、より身近に感じるようになりました。

しかし、同時にアフリカ州が貧困の問題に直面していることを知りました。前橋市での取組を知ったことをきっかけに自分たちにも何かできることがないか考えました。これから先どのようなことができるのか、多くの人が関心をもって協力してくれるように提案してください。

図６　確認したシナリオ

最後に、提案する方法や追究の視点に関わる問いを検討し、提示したパフォーマンス課題のシナリオに当てはめ、単元を貫くパフォーマンス課題として、完成させた。図７は生徒が検討し、共有した追究の視点となる問いである。

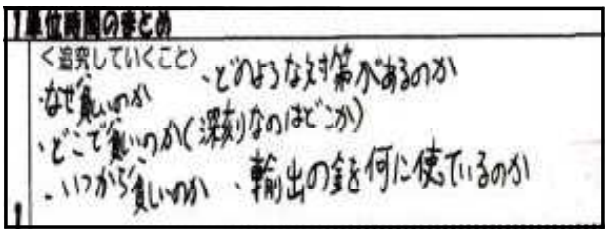


図７　検討した追究の視点となる問い

単元の終末に学習のまとめとして、貧困の問題を抱えるアフリカ州に対する取組を提案するに当たり、「なぜ」という理由が分かるだけでは、情報が不十分であることに生徒自身が気付くことができていた。そのことによって、より具体的に「なぜ」に迫り、貧困問題の解決に対する取組を提案するためには、どのような情報を集めることが必要なのかを考えることにつながり、「どこで」「どのような」「なぜ」「どうしたら」という問いを見いだすことができていた。その際、それらの問いを自ら見いだすことができない生徒もいたが、課題解決ステップアップシートを参考にしたことで、その一部を考えることができた。このように、「つかむ」過程では、生徒と共にパフォーマンス課題を練り上げ、完成させた。

「追究する」過程の学習活動では、「なぜアフリカ州は貧困の問題を抱えているのか」という共通の課題を基に、自然環境、歴史、産業の面から迫った。その際、全ての時間において導入時に、追究の視点となる問いである「どこで」「どのような」「なぜ」「どうしたら」を確認し、学習活動に入った。また、「まとめる」過程でも、追究の視点となる問いを同様に確認し、意見文の作成へとつなげていった。その結果、生徒がそれらの問いを基にして、思考を繰り返しながら自分の考えを形成したり、再構築したりする様子が見てとれた。生徒の意識の変化は、生徒の振り返り（図８）やアンケート調査の結果（図９）からも分かる。なお、同様の変化は、指導案提供を行い、第２学年で実施された授業実践Ⅲにおいても読み取ることができる（図10）。

・はじめよりもいろいろな問題について詳しく考えることができた。
・普段から「なぜだろう」「どこで」「どのような」を意識していきたい。
・具体的に解決策や原因、なぜそうなってしまったのか考えることができるようになった。
・具体的に考えたり、問題と向き合ったりすることができました。

図８　生徒の振り返り

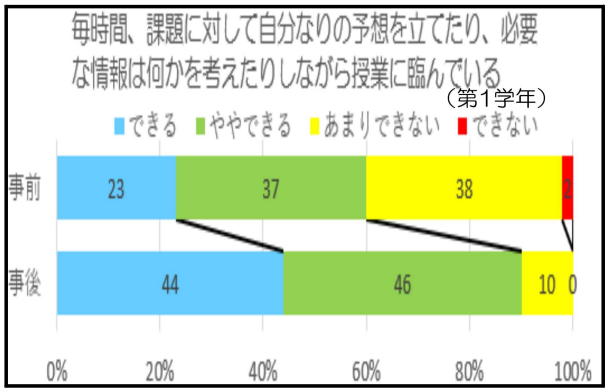


図９　生徒の意識の変化（授業実践Ⅱ）

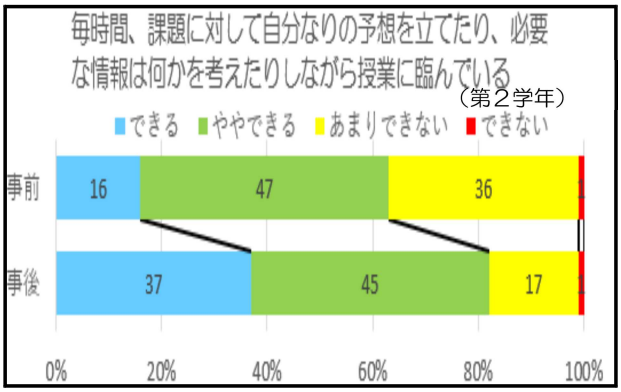


図10　生徒の意識の変化（授業実践Ⅲ）

また、図11は生徒に、「現実感のある課題を追究していくことは、学習内容に対して予想を立てたり、考えを深めたりするときに取り組みやすかったか」という質問に対してのアンケート調査の結果である。「そう思う」「ややそう思う」と回答した生徒が97％を示しており、多くの生徒が、パフォーマンス課題を取り入れた学習活動に対して、肯定的に捉えていることが分かる。このことは、第２学年での実践（授業実践Ⅲ）の結果からも明らかになっている（図12）。

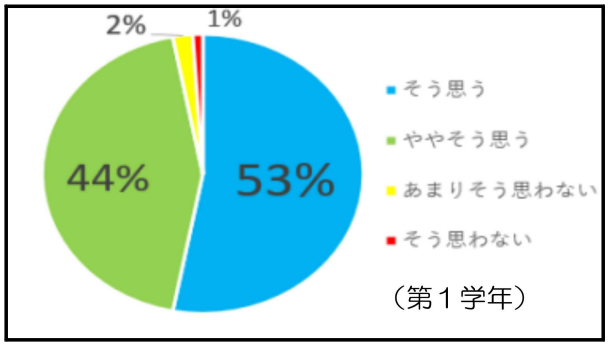


図11　アンケート結果（授業実践Ⅱ）

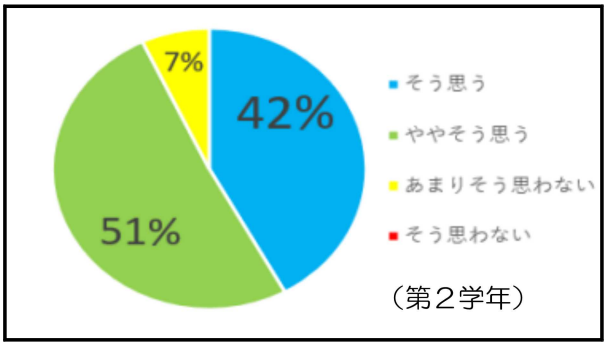


図12　アンケート結果（授業実践Ⅲ）

(2)　考察

アンケート調査の結果から、生徒が学習課題に対して学ぶ意義、有用性を感じ、より意欲的に学習に取り組むことができたことが分かる。本授業実践では、アフリカ州を題材とし、貧困問題に着目して「なぜ、貧困の問題を抱えているのか、課題解決に向けてこれからどのようなことができるのか」という課題を単元を貫く課題として設定した。学習対象となる事象が、生徒にとってあまり近い存在ではなかったが、課題を設定する際に、生徒の学習活動とパフォーマンス課題のシナリオをリンクさせ、単元を貫く課題として生徒と共に設定したことによって、生徒は具体的な状況をつかむことができたため、見通しをもって課題解決に向かえたのではないかと考えられる。また、課

題解決に向けて追究の視点となる問いを「つかむ」過程で見いだしたことにより、「なぜ」「どこで」「どのような」「どうしたら」という問いが意識的に働き、それらを基にして課題解決に向けて思考が繰り返される中で、情報を整理し、自らの考えを形成、再構築することができるようになっていた。このような理由から、現実感のあるパフォーマンス課題を単元を貫く課題として生徒と共に設定し、課題解決に向けて単元構想をすることは、生徒が思考を繰り返しながら課題解決力を高めていくための手立てとして有効であったと考えられる。しかし、追究の視点となる問いをなかなか見いだせない生徒もいたことから、生徒の課題解決力を高め、より確かなものにしていくためには、生徒がこれらの追究の視点となる問いを常に見いだし、それを基にして思考を繰り返しながら学習活動に取り組むことができるような実践を、今後も継続していく必要があると考える。

２　検証の視点２

学びナビを活用し、追究の視点に関わる問いや、使用した資料、及び生徒が１単位時間で得た知識や思考・判断した内容などを記して、思考の過程を可視化することは、生徒が自己の考えを形成したり、再構築したりする際の手掛かりとなり、課題解決力を高めるために有効であったか。

(1)　結果

図13は「学びナビは自分の考えを整理し、まとめたり修正したりするのに役立ったか」というアンケート調査の結果である。学びナビの活用については、94%の生徒が肯定的に捉えている。

今回の実践では、毎時間、授業の導入において、「つかむ」過程で検討した追究の視点となる問いを確認し、学びナビに記入した後、追究する活動へと入った。このことにより、追究の視点となる問いが意識的に働き、「何のための追究活動であるのか」が明確になるため、自分の考えを形成し、学びナビにまとめる際にも多くの生徒が自分なりの言葉でまとめることができていた。このことは、図14のアンケート調査による生徒の意識の変化からも読み取ることができる。

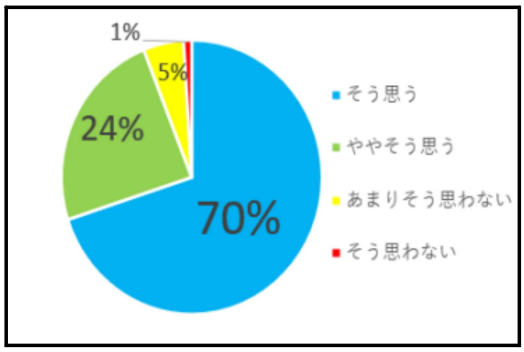


図13　アンケート結果

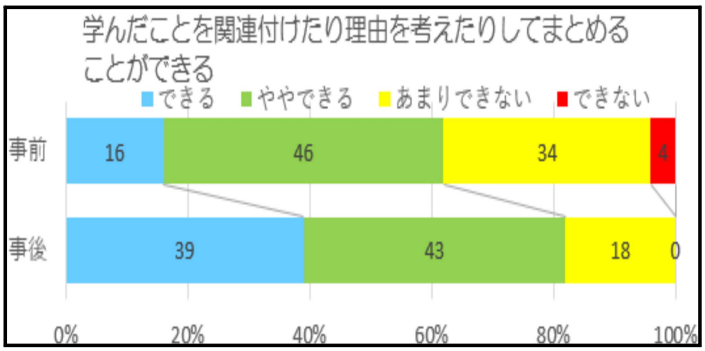


図14　生徒の意識の変化

また、思考の過程を一枚のシートで可視化することによって、自分の思考が課題解決に向けてどのように働いているのかを確認できていることが、学びナビや、振り返りの記述（次ページ図15）から分かる。この生徒は、２時間目の時点では「どのような」「なぜ」という問いに基づいて追究し、資料から分かったことや、それらを関連付けて思考したことを記述し、「どうするべきか」という自分の考えを書くことができていなかった。しかし、課題解決ステップアップシートに照らし合わせて自分の思考の過程を確認し、「どうするべきか」の視点が足りないことに気付き、３時間目にはその点を意識して、思考を働かせた結果、自分の考えも加えて記述することができるようになった。同様の変化を示した生徒が52%であった。単元の終末には、学習の成果物として、学びナビを基にして、意見文を作成したが、その際、学びナビの右の欄の各単位時間のまとめの記述を振り返るだけでなく、左の欄に記入したその記述の根拠となる資料を確認し、自己の考えを再構築している生徒の様子も見られた。次ページ図16は、生徒の学びナビと、それを基にして作成した意見文である。この生徒も次ページ図15で示した生徒と同様の変化を見せている。このようにして、生徒の思考の過程を可視化した学びナビを手掛かりとして、作成された意見文をルーブリック（別添資料参照）に沿って評価したところ、Ａ評価は26%、Ｂ評価（課題解決ステップアップシートのＳＴＥＰ３相当）は68%、Ｃ評価は６％であった。Ｃ評価の生徒の学びナビに記述してある内容と意

見文を結び付けて分析してみると、追究の視点となる問いを基にして情報を集めることができるようになっていたが、それらの情報を根拠として自分の考えを形成するまでに至らず、提案することができていないという共通点が見られた。

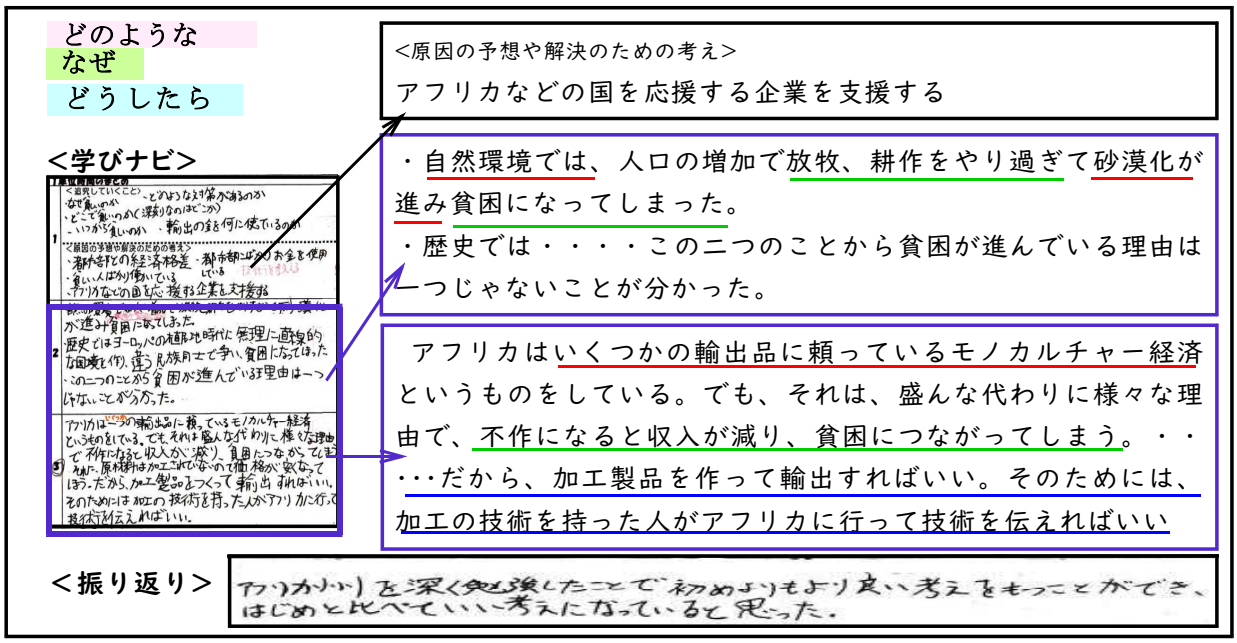


図15　学びナビの記述（上段）と振り返り（下段）

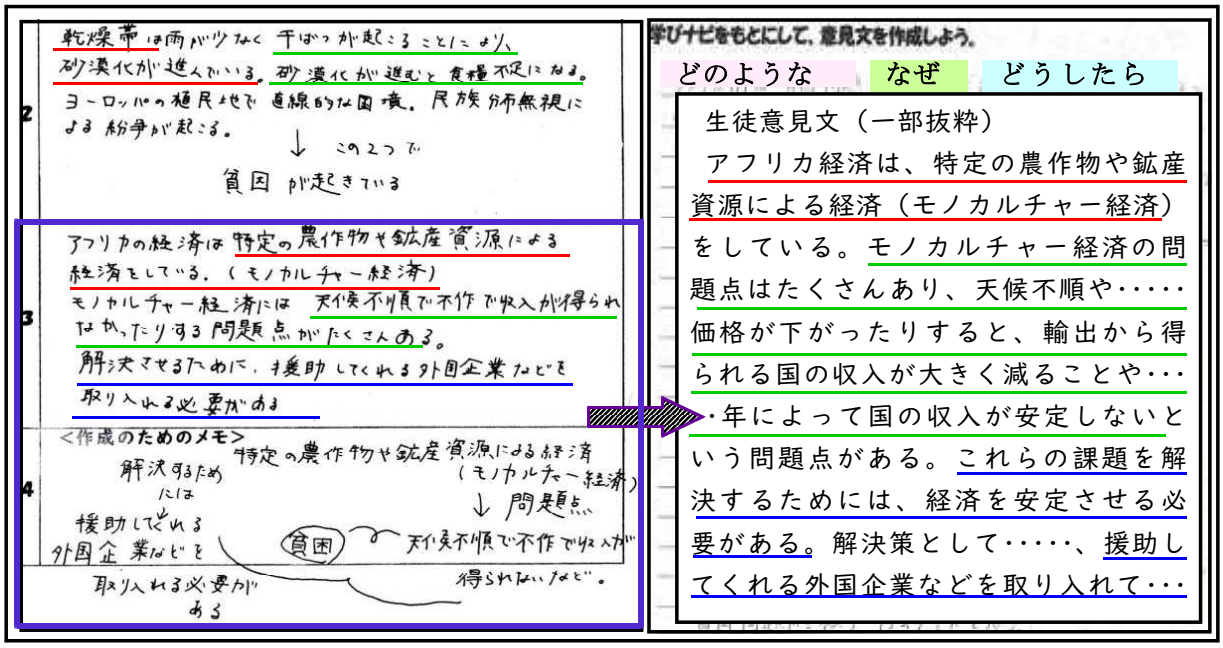


図16　学びナビの記述（左側）とそれを基に作成した意見文（右側）

(2)　考察

学びナビの活用によって、生徒は「つかむ」過程で検討した追究の視点となる問いを毎時間意識し、単元を通してそれらを基に課題解決に向けて思考を繰り返しながら、学習に取り組むことができていた。学びナビの活用についてのアンケート結果で肯定的な意見が多かったことからも、学びナビが生徒にとって考えを形成する際の手掛かりとなっていたことが考えられる。また、一枚のシートで自分の思考の過程や変容について確認することができるだけでなく、更に追究したり、考えたりしなければならないことなどにも気付くことができていたことから、自分の考えを見直し、再構築する際にも、学びナビが効果的に活用され、その結果、課題解決力を高めることにつながったと言える。しかし、集めた情報を整理し、それらを関連付けてどのように自分の考えを表出していけばよいかが分からない生徒や、学びナビを十分に活用して、成果物を作成できない生徒もいたた

め、意見交換や教師からのフィードバックのほかに、テンプレートやリード文を活用して、思考した結果を表出する際の補助とするなどの手立ても必要であると感じた。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

(1)　現実感のあるパフォーマンス課題を「つかむ」過程で単元を貫く課題として生徒と共に設定したことは、生徒が具体的な状況で課題を捉え、解決に向けて追究の視点に関わる問いを見いだすことにつながった。その結果、生徒は常にその視点に関わる問いを基にして、思考を繰り返しながら課題解決に向けて自己の考えを形成、再構築することができるようになったため、課題解決力を高める手立てとして有効であったと考える。

(2)　学びナビを活用して、自分の思考の過程を可視化したことで、追究の視点に関わる問いが意識的に働き、それらを基に思考を繰り返しながら自己の考えを形成したり、再構築したりすることができた。また、自分の思考の過程や深まりについても確認することができたことから、課題解決力を高めるための手立てとして有効であったと考える。

２　課題

(1)　生徒の課題解決力を高め、確かなものにしていくためには、生徒が追究の視点に関わる問いを見いだし、解決に向けて常にそれらの問いを意識し、思考が繰り返されるような授業実践を継続的に行う必要がある。そのため、歴史的分野や公民的分野においても同様の実践ができるように更に研究を進めていく必要がある。

(2)　自己の考えをまとめたり、成果物を作成したりする際に、思考をつなぐことが難しかったり、表現をするときにどのように表現したらよいか分からなかったりする生徒もいるため、生徒の実態に応じてテンプレートやリード文などの支援策を考える必要がある。

Ⅶ　提言

今回の研究では単元構想の中にパフォーマンス課題を取り入れ、「つかむ」過程に位置付けた。「つかむ」過程で単元を貫く課題としてパフォーマンス課題を生徒と共に設定し、思考を繰り返しながら課題解決へ向かう学習活動を行なうことや、学びナビというシートを活用して生徒の思考の過程を可視化していくことを手立てとし、課題解決力を高めることができた。このように、生徒が課題解決力を高めていくためには、課題解決に向けて見通しをもち、社会的事象を捉えるための視点、事象同士を関連付けるための視点、そして、解決に向けて「どうするべきか」などの視点に関わる問いを見いだし、それらを基にして思考が繰り返されていく学習活動を積み重ねていく必要がある。このような授業実践を継続的に行うことができるよう、この度、地理的分野における全単元のパフォーマンス課題の事例集を作成した。先生方の教材研究の一助となればと考える。

＜参考文献＞

・文部科学省　『中学校学習指導要領（平成29年告示)解説社会編』
・群馬県教育委員会　『はばたく群馬の指導プランⅡ』（2019）
・西岡　加名恵　編著　『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てるー学ぶ力を育てる新たな授業とカリキュラムー』　　学事出版（2017）
・西岡　加名恵　石井　英真　編著　『Ｑ＆Ａでよくわかる！見方・考え方を育てるパフォーマンス評価』　　明治図書（2018）
・社会科教育５月・745号　2021年５月１日発行　　明治図書

＜担当指導主事＞

山中　英史　　西原　和久